

す な た う ば ぬ ま  
砂田姥沼遺跡

— 宇都宮市砂田町地内—

砂田姥沼遺跡は、宇都宮市の南東部、鬼怒川と田川の間南北にのびる低い台地上にあります。発掘調査は、「インターパーク宇都宮南」の土地区画整理事業に先立ち、平成10年度と17年度に実施しました。調査した場所は、現在の中央公園の東側300mあたりです。

発掘調査では、古墳時代から平安時代にかけてのたくさんの<sup>たてあなじゅうきよあと ほったてばしらたても</sup>の竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、井戸・<sup>どこう</sup>土坑・溝跡などが発見されました。また、これらの遺構からは、土器（<sup>はじき すえき</sup>土師器・須恵器）や鉄器（<sup>やじり</sup>鍬・<sup>とうす</sup>刀子）・<sup>といし</sup>砥石・<sup>ぼうすいしゃ</sup>紡錘車・<sup>まがたま</sup>勾玉などが出土しています。

注目されるのは、古墳時代の始まりの頃の竪穴住居跡が2軒発見されたことです。これまで「インターパーク宇都宮南」地内では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡を1,000軒ほど調査しましたが、古墳時代の始まりまで遡る竪穴住居跡の発見は初めてです。また、このうちの1軒は、古墳時代の土器（土師器）と一緒に弥生土器が出土しました。このほか、古墳時代の終わり頃から奈良時代のムラの中を流れる水路を行き来する通路状遺構なども発見されています。



1号住居跡

5号住居跡

砂田姥沼遺跡調査区全景（上が東）

古墳時代前期の竪穴住居跡

写真は、砂田姥沼遺跡の古墳時代で最も古い時期の住居跡から発見された土器です。①は煮炊き用の甕かめで、地元の弥生土器に特徴的な縄目の文様もんようが付けられています。②は古墳時代になって見られるようになる土師器はじきつぼの壺や甕です。①と②は近接する別の住居跡から見つかりました。それぞれの土器は見てわかるように、器の形がかなり違います。順番でいうと最初に①の甕が、次に②の甕や壺などが使われるようになります。弥生時代から古墳時代が変わっていく時期の土器の劇的な変化がよくわかります。



①縄の文様がつけられている弥生土器



②古墳時代の土師器



弥生土器と土師器が共伴して出土した竪穴住居跡（5号住居跡）



上空から見たインターパーク宇都宮南（上が北）



水路と通路状遺構